市場が生み出した地域福祉の拠点

静岡県浜松市中央区　高町第三日曜市場

















浜松駅から繁華街を抜け、思いのほか坂の多い街並みに息を切らして歩を進めると、高台に閑静な住宅街が広がる高町に到着する。浜松城の大手門前を起点とする姫街道（本坂通り）が通り、江戸時代には城下の武家屋敷が並んでいた歴史を持つ高町で、毎月開かれる「高町第三日曜市場」（代表：大石賢司さん）を訪れた。

会場は、浜松城を一望できる浜松開誠館高校の駐車場。朝8時過ぎから、スタッフと出店者が搬入と設営を始めている。各店の軒先には、野菜や果物、花、鮮魚、手焼きせんべい、米、茶、福祉施設で作られたクッキーなど様々な商品が並んだ。

この日の特別販売は、創業昭和41年の「御菓子司 あおい」の栗きんとん。主に、静岡県西部地域の特産品や旬の品をスタッフが探し、お店に連絡して買い付け販売するのも日曜市場の特徴だ。法多山名物のおだんごなど、遠方まで出かけることが難しい高齢者に代わって商品を届けると同時に、地域の特産品を知ってもらう機会にもなっている。

出店者の一人、浜名湖近くの舘山寺地区で手焼きせんべいなどを販売する宏和製菓の山本さん。顧客が高齢になり来店が難しい人が増えていたことから、「お客さんが来られないなら自分たちから出ていこう」と浜松駅前の朝市への出店をはじめ、やがて高町の日曜市場にも出店するように。さらに現在では、地元の舘山寺地区で「かんざんじマルシェ」を運営している。「高町の日曜市場でのスタンプカードや子どもたちの販売体験を、マルシェの運営にも活かしています」と話す。

日曜市場の開設当初から約20年、出店を続けている松尾さんは、50代から店をはじめ83歳になった今でも元気な姿で店頭に立つ。「石川こいも300円」「ナス100円」「ク









ルクマの花200円」など値付けをし、自分が育てた野菜や花を販売する。「また、地元高町で明治期から米穀店を営む竹内さんは「地域の商店が徐々になくなっている。車が運転できない高齢者にとって、身近な場所で買い物ができることは大きい」と、地域と日曜市場のつながりの大切さを感じて出店している。

開店の午前10時が近づくと、ロープが張られた前に約40人が並ぶ。開場を待つ人たちにどことなく緊張感が走る。10時になると一斉にお目当ての店へ向かう。「里芋は小さくても熟れてるよー」お店からの呼び掛けに応えるように商品が次々と売れていく。地元高町から来場した古橋さんは、普段はコープの宅配を利用しているが「お店に来て、自分の目で見て、買い物を楽しみたい」と毎月の開催を楽しみにしている。

会場の一角に設けられた交流スペースでは、「高町ふれあいサロン」のメンバーが、来場者に声をかけてお喋りをしている様子。普段は高町の高齢者を対象にお楽しみ昼食会などを開いているが、「日曜市場では、地域の活動とはまた違う人との出会いがある」とメンバーは話す。自宅の不用品や手作り品を持ち寄り必要な人に譲るコーナーを設けるなど、日曜市場が地域の交流を生み出す原動力となっている。

高町第三日曜市場が始まった背景には、小売店の閉店が相次ぐなど地域の買い物環境の変化があったと、同会顧問を務める栗崎弘義さんは振り返る。自治会有志により住民アンケートを行ったところ、買い物困難の状況が明らかになった。そこで、商店主、農家、自治会役員、子育て世代が集まり2007年に日曜市場を立ち上げた。

毎月続けるうちにリピーターが増え、単なる販売の場で









はなく、高齢者が外出するきっかけになり「ここに来るのが楽しみ」という声を聞くようになった。また、民生委員や自治会役員が自然に高齢者に声掛けし、日常的な見守り活動の場となっていった。「住民の小さな声から生まれた市場が地域福祉の機能を生み出した」と栗﨑さんは話す。

日曜市場の運営を支えるのは、5月の浜松まつりで活動する「高町おかめ組」を中心とするメンバーだ。日曜市場の日には浜松まつりの相談もできる。浜松まつりを通じた地域への強い思いをもったメンバーの結束が、日曜市場の運営にも生かされている。

出店者を増やすうえで、副会長の古賀さんと製菓店の山本さんの存在は大きい。古賀さんは商工会議所女性会のつながりを活かし、山本さんとともに様々な店に声を掛ける。お客さんから「野菜がほしい」といった要望があれば新たな出店者を探す。特別販売で出品するお店にも声を掛ける。寿司店が、日曜市場でお客さんの要望をきっかけに新たな商品を開発し、通常営業時の注文につながった例もあるそうだ。

日曜市場は2007年のスタートから開催は224回を数え、累計来場者は3万人を超える。20年近く続いてきた市場を、これからも続けていくことが日曜市場のスタッフの願いでもあり、地域住民の願いでもある。栗﨑さんは「20年を迎える日曜市場のこれからは、若い世代の力を活かし、子どもや高校生にも関わってもらい、4世代が集まる場所にしたい」と今後を見据える。

買い物をする場所でもあり、出かけるきっかけでもあり、地域の生産者や店と住民がつながり、人と人がつながれる場所。高町第三日曜市場はそんな地域の温かさを伝える存在としてこれからも続いていくことと思う。